オノマトペをドイツ語の絵本に取り入れられるか

小田口知可

～はじめに～

私たち日本人は、日頃からオノマトペを駆使してコミュニケーションしている。日常会話や文章にも用いるし、教育においても小さい子に分かり易く名称を伝える術として、代わりに使ったりする。例えば車を「ブーブーだよ。」と伝えたり、犬が居たら「わんわんが居るね。」と小さな子どもに話しかけている親の姿を見たことがないだろうか。子どもが見ているものに対して、耳で聞く音を言葉にして伝えている。より早く理解させたいという想いが現れており、これは、日本人の言語文化の一つである。

オノマトペをストーリーに取り入れた絵本は、年齢を問わず情景が読み手に想像しやすく、伝わるイメージもより豊かになる。しかし、今まで日本で触れたドイツ語の絵本にはこのオノマトペがほとんど使われていないことに気づいた。「ドイツ語の絵本にもこの言語文化を取り入れたら、もっと面白く感じるのではないか？子どもから大人まで楽しめる絵本を描き、完成したものを自分でドイツ語に翻訳して、両国で楽しめるものを作りたい。」そう願ってこの題目を研究テーマとした。

現地では、ホストファミリーや保育所の園長先生に私の疑問を質問できた。その結果や、今後の可能性について、下記に述べる。

～オノマトペとは？～

主に動物の音声や物体の音響を言語によって表した擬音語と、事物の状態や身振り、または感情をそれらしく音声に例えて表した擬態語のことである。擬音語は、生き物の発する声を表す「擬声語（わんわん、ひそひそ等）」と自然界で発生する音や物音を表す「擬音語（しとしと、ゴロゴロ等）」に分けられる。擬態語は、生物の状態を表す「擬容語（うろうろ、ぼうっと等）」、無生物の状態を表す「擬態語（つるつる、さらさら等）」、そして心理状態や痛みなどの感覚を表す「擬情語（イライラ、チクチク等）」に分けられる。

～動物の鳴き声の比較～

動物の鳴き声は、言葉として存在する国が多い。鳴き声を聞いて口真似をし、それがはっきりとした発音・言葉となり、文字で記される。現地でこの件を訪ねた結果、オノマトペとしてしっかり認識されていた。また、動物の鳴き声は世界共通で存在する最も有名なオノマトペと言えるかもしれない。国によってどれだけ音の認識に違いがあるかも比較できるように、英語を含めた３カ国のバージョンで数種紹介する。

【犬の鳴き声】
独：Wau,wau（ヴァオ、ヴァオ）
英：bow_wow
日：わんわん

【カエルの鳴き声】
独：quak（クアク）
英：croak
日：ケロケロ

【にわとり】
独：kikeriki（キッキリキー）
英：cook-a-doodle-doo
日：コケコッコー

上記のように、似ているものも全然似ていないものも存在する。国ごとに音の捉え方が様々であることが分かる。

～文法的な扱いの比較～

ドイツ語では、音を表す言葉が動詞と対応して用いられることがある。

例えば、「たくさんの蜂がブーンと飛んでいる」という文に対して、「summen」という動詞を用いる。「summ(ズゥム)」が音を表しており、「en」がつくことによって「ブーンと飛んでいる」を表す動詞になる。つまりドイツ語でいうと「Viele Bienen summen.」となる。

これはドイツ語と日本語の違いでもある。日本語では副詞として音の表現が用いられるが、ドイツ語ではそのまま動詞に成り得るのだ。これはオノマトペに非常に近い表現方法であると考える。

～教育的観点の比較～

訪問させていただいた保育所の園長先生に、「親が子へ、または保育所の先生から園児へ何か音で表現できるようなものを伝える時、オノマトペを使わないのですか？」と質問をした。

例文をあげると、「雨の降り方」について、日本人は様々な表現を用いる。
「①ポツポツと雨が降る」「②しとしとと雨が降る」「③ざあざあと雨が降る」等だ。

これらは全て、日本語の辞書でも副詞として記されており、私たちが日常会話でよく使うものでもある。しかし、答えは「Nein（いいえ）」だった。

園長先生によると、何か音や状況を伝えたい時、共に目の前の現状を確認して口真似をすることはあるが、あくまでその場限りの表現であって、言葉として教えることはないという。また、辞書で調べてみたところ、①～③までその状況を伝える動詞は存在することがわかったので、下記に例として述べる。ただしこちらは、音を基にしたようなものではなかった。

【雨の降り方】
「①ポツポツと雨が降る。」
↓
「Es tropft.」
直訳：雨が滴り落ちる。

「②しとしとと雨が降る。」
↓
「Das Regen rieselt.」
直訳：雨が流れ落ちる。

「③ざあざあと雨が降る。」
↓
「Es schüttet.」
直訳：土砂降りだ。

（写真 1：保育所の読書スペース。子どもたちは毎朝自分が行いたいことを決めて先生に伝え、それぞれのスペースで 1 日を過ごす。途中で移動や変更も可能。）

もう一つ、「日本では車が来たら、『ブーブーが来たよ。』と子どもに伝えることがありますが、ドイツでそのようなことはありますか？」と尋ねたところ、この質問に対しての回答も「Nein」だった。名称としてオノマトペを用いることはまず無く、教育上でも子どもたちに正確な言葉を覚えてもらうように心がけているという。

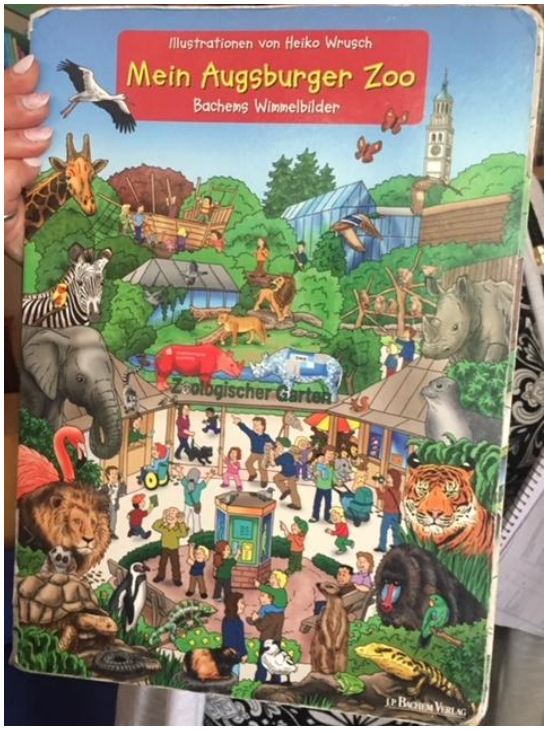
～ドイツ語を学ぶ子どもたち～

今回訪問した保育所はとても多国籍な環境で、数十カ国から子どもたちが集まっている。

ドイツでは、このような環境が日常的で、別途訪問させていただいた小学校でも約 100 カ国から子どもたちが集まっているそうだ。

様々なバックグラウンドがある子どもたちは、まずは母国語ではないドイツ語を覚えるというミッションが発生する。「小学校やその後の教育課程で子どもたちが困らないように、生活に必要な言葉をこの保育所では教えています。」と園長先生はおっしゃっていた。このことから、音の捉え方に大きく違いが出るオノマトペを、普段の会話の中で、物事の状況を伝えたり名称の代わりに用いる文化がドイツには根付いていないと言える。

これは島国である日本と多くの人種が混在するドイツでの言語教育の差である。ただ、オノマトペは文法に基づくだけでなく「ポツポツ、ざあざあ」など単純に音を口に出し、情景をイメージして楽しむという側面もある。実際に園長先生に人気の絵本を訪ねたところ、文章でなく絵を中心にしたものが人気だった(写真 2)。生まれや文化を超えて子ども同士の感性を豊かにしてくれるツールとして、日本のオノマトペは有効なのではないかと考える。



（写真 2：「子どもたちに人気の絵本を教えてください」と尋ねた際に、園長先生が出してくれたもの。アウクスブルグの動物園を題材とした、文章なし・絵のみで構成された絵本。）

～おわりに～

オノマトペをドイツ語の絵本に取り入れることができるのか？その答えは「Ja（はい)」であると考える。ただし、今回様々な観点で比較をしたことで、日本語の擬音語や擬態語を、ドイツ語でそのまま表現していくことの難しさが分かった。

一方で、広い可能性も感じている。現在、漫画やアニメの普及で、様々なオノマトペがドイツ語で次々と訳されている。現地の書店で漫画コーナーを見た時、今後もっと身近なものになっていくだろうとも確信した。漫画の様に背景の一部として取り入れたりすることもできるだろう。

私がオノマトペを使用してドイツ語で絵本を描きたいと思った理由は、「ドイツ人と日本人が、お互いの文化を知れて子どもから大人まで楽しめるツールを作りたい。」と思ったからだ。今回比較して分かった点を踏まえながら、今後の国際交流で役に立つような、また様々な人に楽しんでもらえる絵本を制作していきたい。

＜参考資料＞

アクセス独和辞典　第 3 版
アクセス和独辞典
https://pj.ninjal.ac.jp/archives/Onomatope/column/nihongo_1.html